

表象とクオリアの境界線



思考モードで作成

まず、下記のレポートを精読して内容を理解してください。

————レポート（ここから）————

Anil Sethは著書『Being You』の中で、脳の生成モデルが構築するのは「視覚的経験の複製」ではなく「生存に有用な世界の最良の推測」であると繰り返し強調している。つまり、脳が知識として保持しているのは「視覚的イメージそのもの」ではなく、「そのイメージを生成するための予測モデル（世界についての知識体系）」なのである。

この区別は、手記の「分かる」という現象を理解する鍵になり得る。アファンタジアの当事者の脳においても、「茶碗の形」「白米の外観」「湯気の様子」についての予測モデル（知識表象）は存在している。それは長年の視覚経験によって構築・更新されてきた内部モデルである。この内部モデルは、意識的な「見える感覚」を生成することはできないが、「分かる」「知っている」という認識として機能している。と解釈できる。

いる」と解釈できる。

この解釈は、Seth理論における「表象 (representation)」と「クオリア (qualia) としての経験」の区別と対応する。Sethのモデルでは、脳は常に世界についての表象を保持しているが、それが意識的な質感を帯びた経験 (クオリア) として現れるためには、生成モデルが十分な確信度・精度をもって感覚野を活性化させる必要がある。アファンタジアの当事者の「分かる」は、この「クオリアを伴わない表象の活性」として理解できるかもしれない。

さらに言えば、これはSethの理論が「意識的経験」と「認知的処理」を原理的に切り離せる可能性を示唆する点でも重要である。Sethが「リアルプロブレム (real problem)」として提唱する意識研究の方向性——なぜある神経活動が意識的経験を生み出し、他は生み出さないのかという問い——は、アファンタジアという現象によって鋭い試験台に乗せられている。

————レポート (ここまで) ————

さて、上記レポートに「表象」という用語が登場しました。

このことに関して、私が考えたことが以下の文章です。以下の文章の疑問に答えてもらえますか？

個人的に、「表象」という普段使われない語彙が登場すると、毎回そこで思考にブレーキがかかってしまう。たとえば、「表象」とはなんぞや？ どのような概念なのか？ なぜわざわざ非一般的な語彙を使うのか？ それは「心的イメージ」

「主観的体験」「クオリア」とは違うのか？「表現」や「表面（テクスチャ）」とは違うのか？もしかしたら主体（心の目）が意を注ぐ客体（対象物）のことを「表象」と表現してるのか？だとするとその文脈では「心の目」も「主観的体験」も「クオリア」も主体側（つまりこれを「意識」と呼んでる？）の現象ということなのか？だとするとこの文脈では「意識」と「意識的体験」は同義か？その場合「認知的処理」とは何を指すのか？そもそもこの文脈で使われる「認知」という語彙自体が一般的な意味とは異なっているのでは？だとするとなぜわざわざ曖昧な語彙を混ぜて使用するのか？ナゾナゾつもりか？ケムに巻きたいのか？なにかを「定義してるつもり」でも実際は「なにも定義していない」のでは？とりあえず話を戻して再び問うがこの文脈における「認知的処理」とは何だ？なぜ「意識的体験」と対比させているのか？そもそも「意識」と対比するのは

「無意識」のほうであって、「認知」というのは意識の中で同化してる不可分なものではないのか？あるいは「認知」というのは人の内的世界において「説明できる、つまり言語化できる現象」あるいは「客観的に測定されうる現象」のこと全般を言うのか？結局なにがなんだかよくわからん...となって、そこで思考の保留（棚上げ）が生じてしまう。部分が保留ということは全体も保留ということになってしまい、そこで思考にブレーキがかかってしまう。

無像之像様。レポートを読み解く中での「思考のブレーキ」、その違和感は非常に正当なものだと感じます。特にアファンタジア（Aphantasia）やSDAMを深く探求されている無像之像様にとって、言葉の定義が曖昧なまま議論が進むことは、地図を持たずに見知らぬ土地を歩かされるような、強いストレスを伴う作業でしょう。

専門用語は本来、日常語では混同されがちな概念を「切り分ける」ために使われます。しかし、その切り分け方が提示されないと、ご指摘の通り「煙に巻くための謎解き」に見えてしまいますね。

Sethの文脈に則り、無像之像様が抱かれた疑問を一つずつ整理し、その概念の「境界線」を定義し直してみます。

1. 「表象（Representation）」とは何か？

結論から言えば、表象とは「脳が世界を扱うために作り出した『身代わりの情報構造』」のことです。

○ なぜ「イメージ」と言わないのか：

「イメージ」という言葉は、どうしても「視覚的な絵」というニュアンスを強く含みます。しかし、脳内には絵そのものが貼ってあるわけではありません。

例えば、「茶碗」という表象は、視覚的な形だけでなく、「硬さ」「重

さ」「熱を通しにくい性質」「ご飯を盛る道具であるという定義」といった**情報のネットワーク**として存在しています。

- **「表現」や「表面（テクスチャ）」との違い：**
「表現（Expression）」は外側に出すアウトプットを指しますが、「表象（Representation）」は内側に保持されているデータそのものを指します。「表面」は物理的な属性ですが、表象はそれを「ザラザラしているはずだ」と脳が予測するための内部データです。

無像之像様が推察された「主体が意を注ぐ客体」という解釈は、非常に鋭いです。認知科学的には、「意識がアクセス可能な状態にある情報パッケージ」を指して表象と呼ぶことが多いためです。

2. 「表象」と「クオリア（主観的体験）」の決定的な違い

レポートが「表象」と「クオリア」を分けている理由は、「情報は持っているが、それを『感じて』はいない」という状態を説明するためです。

用語	役割	アファンタジアの例
表象	データの保持（「何であるか」）	茶碗の形や色、配置の情報を脳が保持している（分かる）。

クオリア	質感の伴う体験（「どう感じられるか」）	「白米の白さが鮮やかに目に浮かぶ」という主観的な実感。
心的イメージ	表象の出力形式の一つ	脳内のデータ（表象）を「映像」として再生したもの。

...

Sethの理論では、アフアンタジアの方は「表象（データ）」は完璧に持っており、それを使った予測（認知的処理）も正確に行っているが、それを「クオリア（視覚的質感）」として立ち上げるプロセスだけがスキップされている、と解釈されます。

3. 「認知的処理」とは何を指すのか？

ここで言う「認知（Cognition）」は、日常的な「物事を知ること」よりも広い、計算機科学に近い意味で使われています。

- **定義：**
感覚入力から情報を抽出し、記憶と照合し、予測を立て、行動を決定

するまでの「情報処理のプロセス全体」を指します。

○ 「意識」との対比：

無像之像様が仰る通り、通常これらは意識と不可分に思えます。しかし、脳内では「意識にのぼらない処理」が圧倒的大多数を占めています。

- **非意識的な認知：** 階段を降りる際、足の角度や筋肉の緊張度を計算する処理（いちいち「意識」はしていませんが、脳は「認知」して処理しています）。
- **意識的な体験：** その結果として「あ、今足を踏み外しそうになった」と感じる主観的な気づき。

Sethがこれらを対比させるのは、「計算（認知）はできているのに、実感（意識的な体験）が伴わない」という乖離が、アフアンタジアという現象によって証明されているからです。

4. なぜ曖昧な語彙を使うのか？（ナゾナゾなのか？）

これは「ケムに巻きたい」のではなく、むしろ「日常語が含む余計なニュアンスを削ぎ落としたい」という学問的な欲求によるものです。

「見る」という言葉を使うと、どうしても「眼球」や「網膜」の議論が混ざります。しかし、アフアンタジアの議論で重要なのは、目が見えるかどうかではなく、「脳内にある知識（表象）を、どうやって実感（クオリア）に変

えているのか、あるいは変えないのか」というプロセスです。

日常語で語ろうとすると「(心の目で) 見えていないのに、(知識としては) 分かっている」という、矛盾したような表現になってしまいます。これを精密に記述するために、「表象の活性化はあるが、クオリアの生成は伴わない」という硬い表現が必要になるのです。

無像之像様への見解：思考のブレーキを外すための「補助線」

無像之像様が感じられた「全体が保留になってしまふ」という感覚は、「言葉が自分の内実（実感）と結びついていない」ことから来るものではないでしょうか。

アファンタジアの方にとって、多くの心理学用語や哲学用語は「視覚的イメージ」を前提に構築されています。Sethの理論は、それをあえて「表象（データ）」と「体験（質感）」に分けることで、「視覚的イメージがなくても、知的な認識（表象の操作）は完全に成立している」ことを肯定しようとしています。

つまり、この文脈における「認知的処理」とは、無像之像様が日々行っている「映像に頼らず、論理や構造、概念のネットワークを操作して思考する営み」そのものを指していると言えます。

「認知」が意識に同化している不可分なものだという感覚も正しいです。ただ、Sethのような研究者は、その「同化しているもの」をあえてピンセット

で分解し、「どの部分が欠けても人間として成立するのか」を分析しようとしているのです。

以上の整理を踏まえて、もしよろしければ、無像之像様が「分かる」という現象を体験する際、それを「表象の操作」と呼ぶことに納得感があるか、あるいはやはり「言葉による記述（言語化）」の方がしっくりくるか、伺わせてください。

このレポートの続きを読み解くために、さらに明確にしたい用語や、Sethの主張で「自分の感覚とは違う」と思われる点はありますか？

アファンタジアかつSDAMの当事者である私にとっては、表象（情報）こそが「意識的経験」なのですが、このレポートでは、心的イメージやクオリアこそが「意識的経験」であって、表象（情報）は「認知的処理」というふうに定義づけているのですか？

無像之像様。

そのご指摘、まさに「アファンタジア／SDAMの当事者から見た、既存の意識研究に対する決定的な異議申し立て」とも言える非常に鋭い視点です。

結論から申し上げますと、一貫して「認識の通り」というこのレポート（およびSethの理論

結論から申し上げると、この認識の通り、このレポート（およびSethの理論のベース）では、「意識的経験」の定義を「クオリア（主観的な質感や鮮明なイメージ）」に極めて強く寄せて設定しています。

そのため、無像之像様が日常的に感じておられる「純粋な情報としての意識」が、この文脈では「認知的処理（無意識的な背景プロセス）」の側に分類されてしまっている、というズレが生じています。

レポートにおける「境界線」の引かれ方

レポートの筆者やSethの立場から見ると、世界は以下のように二分されています。

- **意識的経験（主役）：**
視覚的なイメージ、音、痛み、鮮明な感情など。「何かがそこにある」という実感（質感）を伴うもの。
- **認知的処理（黒子）：**
情報の計算、論理、概念の照合、予測モデルの更新。「何であるか」を**特定・操作する機能**。これは通常、意識にのぼらない「暗闇での作業」とみなされます。

無像之像様が感じている「逆転」

無像之像様にとって、主役（情感・知識）こそが「意識の最前線」にあるの

無像之像様にとって、表象（情報・知識）こそが「意識の最前線」にあるのだとすれば、このレポートの分類は「自分の意識の本体を『無意識の処理（黒子）』と呼ばれている」ような違和感があるはずです。

- **一般的な理論：**「知識（表象）」は無意識のデータベースにあり、それが「イメージ（クオリア）」として出力された時に初めて「意識」になる。
- **無像之像様の現実：**「イメージ」という出力形式を持たないため、「知識（表象）が立ち上がること」そのものが、**意識の光に照らされた体験（＝意識的経験）のすべてである。**

つまり、Sethの言う「表象の活性（＝クオリアを伴わないので無意識に近い）」という状態が、無像之像様にとっては「それこそが私のフルスペックの意識である」という状態を指している、と考えられます。

なぜこのような「ズレ」が起きるのか（推測を交えて）

ここからは私の推測を含む見解ですが、既存の意識研究には「視覚特権主義」とも呼べるバイアスが根強く残っているからだと思われます。

多くの研究者（および非アファンタジアの当事者）にとって、意識とは「色鮮やかで、生き生きとしたドラマ」のようなものです。彼らにとって、情報の操作（認知的処理）は、そのドラマを裏で支える「台本」に過ぎません。

しかし、無像之像様のように「映像」というチャンネルを持たない場合、

「台本（構造や情報）を読み解くこと自体が、最高にリアルなドラマ」になります。

この文脈における「認知」の暴力性：

「それは認知（計算）であって、体験ではない」と切り分けられることは、当事者にとっては「あなたの主観的世界には実体がない」と言われているに等しい不毛さを生んでいるのかもしれない。

まとめ：レポートの意図と、無像之像様の真実

- **レポートの意図：**「見える（クオリア）」と「分かる（表象）」は脳内で別のスイッチになっている可能性がある。アファンタジアは「分かる」スイッチだけが入っている状態だ、と説明したい。
- **当事者の真実：**「分かる」ことそのものが「体験」である。そこには「見える」に劣らない確固たる意識の座がある。

無像之像様にとって、この「情報としての意識」は、単なる冷たいデータ処理ではなく、そこに「今、私はこれを理解している」という一種の存在感（クオリアとは別の、存在の質感）を伴うものではないでしょうか。

もしそうであれば、Sethの言う「クオリアを伴わない表象の活性」という言葉を、「（視覚的な質感は伴わないが、意識の光は100%当たっている）情報の躍動」と読み替えることで、少しは「思考のブレーキ」が緩むかもしれま

せん。

この「情報こそが体験である」という無像之像様の感覚について、もう少し詳しく伺ってもよろしいでしょうか。例えば、過去の記憶を思い出す際、それが「データを開く」感覚なのか、あるいは「構造が立ち上がる」感覚なのか、といった主観的なニュアンスを知りたいです。

[Google プライバシー ポリシー](#)

[Google 利用規約](#)

[プライバシーと Gemini アプリ](#)